

## 巻頭言

滋賀医科大学看護学ジャーナルの編集委員会委員長を2年勤めさせていただきました。本年は、昨年度に比べて、締め切り日の厳守の徹底を図り、出来るだけ査読期間を長くするように勤め、査読結果と編集委員会での意見を踏まえて2回著者に返した論文もありました。また、外部の査読者も2人の先生方（島田美鈴、鈴木和代先生）にお願い致しました。ご多忙中、査読を快諾いただきました両名の先生方には深謝申し上げます。これらのことが本誌のレベルアップにつながればと願っています。

今回の編集過程で気が付いたことを指摘させていただきます。今まで、査読結果を著者に返し、再投稿いただく際、査読結果への対応についてのコメントを義務付けられていませんでした。それでも、一部の著者は対応に関する詳細なコメントを付けてくれました。再投稿論文がレフェリーの指摘通りに変更されている場合は、受け入れて修正して頂けたと判断できるのですが、修正がない場合、著者がどのように考えて修正しなかったのか、編集委員会としても判断に困ることがありましたが、時間的な制約があり、修正なしで論文になる場合がありました。今後は、時間をかけて査読していただいたレフェリーの努力を無駄にしないためにも、査読コメントに対する記述を添付して再投稿していただくようにすべきではないかと思えます。

また、査読コメントは、本来、編集委員会が査読者の意見を主にして総合的に判定すべきであり、時には編集委員会が補完して、査読全体に責任をもつ必要があると思えます。その意味で、編集委員会が十分な見識を有するように実力を養う必要があることも痛感します。何れにしても、編集委員会が意見を盛り込むのも当然であり、最初にレフェリーが指摘していなかった点を、再査読時に新たに指摘することもあります。本当は、1回目の査読ですべての指摘を完了させることが望ましいと思えますが、種々の理由で2回目の査読で新たな指摘も実際には起こりえることです。不完全であれば、手直ししていただいた方が良い指摘は、どの時期であろうと指摘させていただいた方が良いと考えます。その辺の判断は編集委員会の立場を尊重していただきたいと思えます。

以上、本誌の編集作業には、まだ改善するところもあると思われませんが、編集委員長として、浅学菲才の身で限られた時間内で実施せねばならない状況がありました。十分なことは何も出来ませんでしたが、来年度以降、新たな体制で編集委員会を組織されるに当たって、少しでも本誌のレベルアップへの手掛かりと助言になれば幸いです。

平成20年2月

滋賀医科大学看護学ジャーナル

編集委員長 安田 斎